Japanese Association for Tibetan Studies

プトンとツォンカパの成仏観の差異について
——『五次第』の解釈を通じて——

平岡　宏一

はじめに

チベットにおいて秘密集会タントラの聖者流は隆盛を極めた。これは14世紀に活躍した二大学僧プトン（Bu ston Rin chen grub, 1290–1364）とツォンカパ（Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357–1419）がこの流派を大変重要視したことによる。

さて共に聖者流を自認する両者は究竟次第のテキストである『五次第』（*Pañcakrama*）についての注釈を残しているが、その解釈に大きな相違点を見いだすことができる。これまで定寂身、定寂心、幻身等の各々の次第に関して両者の見解の相違については既に報告した（文献表参照）。今回は両者の解釈における『五次第』の後半の三次第の幻身、第四次第光明、第五次第双入の関係を取り上げ、両者の見解の相違点の背景にある両者の成仏観の違いを浮き彫りにし、各々の成仏観の典拠について考察することとする。

1　『五次第』（*Pañcakrama*）の構造

『五次第』の後半は“第三次第幻身”の達成　⇒“第三次第幻身”が消滅し、“第四次第の光明”を達成する　⇒“第五次第の双入の幻身の出現”の順で展開する。このことに関しては、プトンとツォンカパの両者にとっても共通の認識となっている。また“第四次第の光明”についてツォンカパは『五次第の明照（*rGyud kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i man nag rim pa lnga rab tu gsal ba'i sgron me*, RIGS）』の中で「有学の道において大楽智が真実性の意味を直接に悟入した勝義の光明」（80b2–3）(1)と述べ、“空性を直観的に理解する聖者の三昧智”としているのであるが、プトンも「光明とは、即ち甚だ明瞭でつねに顕現する特徴を持つ勝義諦自体の特徴を智慧の眼で見ることである。そのように一切空そのものを直接に〔悟入〕して（後略）」（RNMKH, 17b3）(2)としており、第四次第の光明を、“空性を直観的に理解する三昧智”とする点では同じである。

2　第三次第の幻身と第五次第の双入の幻身についてのプトンとツォンカパの主張

プトンとツォンカパの両者の見解が最も異なるのは第三次第の幻身と第五次第の双入の幻身の関係についてである。両者の見解を見ていこう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

1. プトンの主張

1.1 第三次第幻身の内容

まず、プトンである。プトンは第三次第の幻身説の特徴を次のように述べる。

> 知るべき事とは《三界すべては幻の如き身，大持金剛の自性と知る》事であり，捨てるべき事とは《幻の如しと知らずに事物を実体〔あり〕と執持して業を積み輪廻に漂流する》ことであるから，それが捨るべきものである（RNMKH, 9b4–5）(3)。

そして以上のような立場から、幻身を達成するための有効な方便として「不浄の幻」と「清浄な幻」の二つを説く（RNMKH, 11a7–12a2)。概略は以下のようである。

> 不浄の幻
> 汚れていない鏡に自分の影像を映して、その影像と自分が一つとなって自身を影像の如しと思念し、やがてすべてのものも影像の如く一味であると信解する。
> 清浄な幻
> 次に持金剛の姿を鏡に映しその影像と自分が一つとなって自身は持金剛なりと信解し、次に全ての存在が持金剛の影像と信解する。

以上の内容は、先の幻身の特徴と相応する内容となっており、“不浄の幻”は幻身の特徴の「捨てるべき事」と、“清浄な幻”は同様に「知るべき事」を達成するための行という構造になっている。

1.2 第三次第の幻身の消滅

次に第三次第の幻身の消滅についてである。プトンは次のように説く。

> 口訣の要所を備えている者は、中有〔の時、これが〕中有であると認識するものとなる。中有の風（ルン）と心から出来た幻の如きこの身を、“総持”と“随滅”の二つの禅定のいずれかをすることで光明に入れる（RNMKH, 16b3–4）(4)。

随滅（anubheda）と総持（piṇḍa grāha）。この二つの禅定は、『五次第』や *Caryāmelāpakapradīpa*（CMP）にも紹介されているが（*Pañcakrama*, Mimaki & Tomabechi 1994,（Abhisambodhikrama, k. 25–27）; CMP, 88b4–5)、プトンが想定した内容は次のようなものである。

“随滅”(anubheda)

如幻の三摩地によって堅固・動、①器〔世間〕と有情〔世間〕すべては幻の如しと見て、そしてそのことに気を散らさずに〔集中して〕いずれも見ない方法で空性と分別したことでそのすべてが順に光明に消えてしまうことが“随滅”の禅定である（RNMKH, 17b4–5）(5)。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

"総持" (piṇḍa grāha)

②自他の堅固・動、三界一切が大持金剛の身、幻の如き身一つと見る。そしてそのことに一心に集中して気を散らさずに分別したことで、〔幻の如き〕身それ自体が光明、即ち雲一つ無い虚空の如くになったことが "総持" の禅定である (RNMKH, 17b5–7)(6)。

下線部①②を見てわかるようにプトンの想定した禅定は、"随滅" は「不浄の幻」で観想した内容、"総持" は「清浄な幻」で観想した内容を光明に入れ、第四次第の光明を達成するというものである。

1.3 第五次第の双入の幻身の達成

プトンは第三次第の幻身を "総持" と "随滅" の禅定で光明に引き入れてから、光明より第五次第の双入の幻身を達成するまでの過程について次のように述べている。

> "双入の身体" を起こそうとする信念を先から持って二つに禅定によって幻身を光明へ入れることを観想するべきである。観想したことで (中略) 光明を証得することに等引し続ける。〔そのことで〕幻を光明の火で浄化してから、先の信念が原因となって想念を回復する。そして三摩地による瑜伽によって逆行の三顕現 (顕明・増輝・近得) の〔智慧とその〕智慧の風(ルン)を伴ったものから "双入の身体" を、水面から魚が飛び出す格好で起こすものとなる (RNMKH, 16b4–6)(7)。

光明を達成してそこから "双入の身体" を必ず起こそうという信念を持っていた行者は、光明を達成した直後、信念の力で光明より "双入の身体" を起すとプトンは主張する。この "双入の身体" は文中に「三顕現 (顕明・増輝・近得) の〔智慧とその〕智慧の風(ルン)を伴ったものから」とあることから、智慧、即ち意識と風(ルン)で出来た幻身であると思われる。プトンは別の箇所で「中有の双入受用身 (bar do zung 'jug longs spyod rdzogs pa'i sku)」(RNMKH, 19b4) と述べ、この段階で「再生の変化身をもって衆生利益をなすものとなる (skye ba sprul pa'i skus sems can gyi don byed par 'gyur ro)」(RNMKH, 19b4–5) として変化身を流出して衆生済度を開始するとするのである。

プトンの成仏階梯では光明を達成することが行の眼目で、第四次第の光明を達成したら、前もっての信念の力で自然に第五次第の双入の幻身は達成できるとするのである。

以上纏めると次のようになる。

> ・プトンの想定した第三次第の幻身から双入の身体までの移行過程第三次第の幻身の観想で三界すべてを幻の如き身、大持金剛の身と観想　⇒中有において "総持" と "随滅" の禅定により第三次第の幻身を光明に引入し、光明を達成　⇒光明達成前に強く思っていた信念の力で、光明より双入の受用身を起こす

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

1.4 プトン説の典拠

次にプトン説の典拠である。プトンはいずれも自説の典拠について全く言及していない。しかしインドの典籍に説かれる学説の一部を継承していると思われる箇所が多々見受けられる。以下はプトンの説との関連性が窺われる箇所である。

1.4.1 第三次第の幻身観の典拠

プトンの説では第三次第の幻身はすべてのものを幻（不浄の幻）、あるいは大持金剛の影像（清浄な幻）と心の中で観想する内容となっている。これとの関連が想起されるのはCMPに対するシャーキャミトラ（Śākyamitra）による複注 *Caryāmelāpakapradīpanāmaṭīkā*（CMPT）の次の箇所である。第三次第の幻身について論じている箇所である。CMPの本文と併せて見てみることとしよう。

> CMPの本文
> （中略）「①自らの心を正しく如実にことごとく知る」ということは、②諸々の蘊・界・処はなく、③智慧だけによく顕現するものだけによって全ての相を備えた尊の身として認識された彼のものもまた、幻と夢などの十二種の譬えでよく象徴されていて、これは諸仏の意の自性の身体である〔ということである〕（CMP, 94b2–4）(8)。

シャーキャミトラのCMPT

①「自らの心」とは、自らの智であって、（中略）「如実に」とは、どのように存在するか〔ということである。〕それを「ことごとく知る」とは、無知ではないことである（CMPT, 71b1–2）(9)。

②「諸々の蘊・界・処はなく」とは、自性空のゆえである（CMPT, 71b2）(10)。

③「心（智慧）だけに顕現する」とは、否定〔対象〕を述べたのであって、〔心だけに顕現するの〕ではないことを否定したのである。その心にどのように顕現するかといえば、一切の相を具足した尊身を顕現するであり、点などの相から想起したり、順に三十二相八十種好で飾られた尊身を起こすことをそのようにいうのである（CMPT, 71b2–4）(11)。

シャーキャミトラは①②は空性の理解を意味するとし、③で第三次第の幻身を自性空の理解を伴う心の中での尊身の観想と限定し、心以外に顕現することを明確に否定している。

ちなみにプトンは、シャーキャミトラを「〔『五次第』のうち〕第二次第はシャーキャミトラがお書きになった」（GSTY, 32b3-4）(12)とする立場であったので、『五次第』の筆者の一人であるシャーキャミトラの解釈は絶対であったと思われる。他にナーガボーディ（Nāgabodhi）*Pañcakramaṭīkamaṇimālā*（PKTM）とヴィールヤバドラ（Vīryabhadra）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

Pañcakramapañjikārthaprabhāsa (PKPP) も第三次第の幻身を心の中だけの顕現とする立場を取っている(13)。

以上のことからプトンの第三次第の幻身の解釈はこれらインドの一部の学匠たちの学説を継承していると考えられる。

1.4.2 第五次第の双入の幻身観の典拠

次に第五次第の双入の幻身観の典拠である。これに関しては先のナーガボーディ作のPKTMの以下の箇所が関連を想起させる。

> 光明は“因”である。それ（光明）から身体が出生するゆえに。自加持は“果”である。それ（自加持）はそれ（光明）から出生するゆえに（PKTM, 117b5)(14)。

> 「幻身は（中略）香食の有情」と言われるのは、身体の籠を捨てて全ての根〔識〕が揃った他の体を獲得するのである。ここで幻の如き身において〔通常の五〕蘊の分別を縁じないゆえに香食の有情そのものであって、香食の有情と幻身に違いはわずかもない。（中略）その智慧の身は一切空性の真実性より出生したのである(PKTM, 120a5-b2)(15)。

プトンはこのPKTMをナーガボーディの作ではなく、偽作であるとしている（**** 37a1–2)。その根拠は吉水千鶴子博士がご指摘のように（吉水1988, 456)、空性の解釈が唯識的であることが原因ではないかと思われる。しかし実際、全てのものを智身の顕現と見る観想を幻身と定義していながら、光明、即ち一切空から、肉体を離れて智身が出生するというPKTMの構造はまさにプトン説の原型といえ、プトンの解釈もこの延長線上にあると思われる。

また他にアバヤーカラグプタ（Abhayākaragupta）の *Svadhiṣṭhānakramopadeśa* (SAK) はチャクラサンバラ関係の典籍であるが、これにもプトンと類似すると思われる以下の記述が見られる。

> “随滅”の次第によって、鏡に息を吹きかけた際に〔端から徐々に〕消滅していくように、第十地の自在者である幻身は、第十一地において〔二〕障と伴う住所を転変する本性である光明に入ったことをよく示したのである。(中略) 所化の福徳と〔行者〕自身の祈願をなした〔力〕によって、瞬時に（中略）大楽の自性、大悲の本性による双入の受用身を、流れを断つことなく大量の様々な変化身として虚空の範囲を満たして利他を正しく成就するものとなる（SAK, 250b7–251a1)(16)。

ここでアバヤーカラグプタは双入の受用身を起こす因を、「所化の福徳と〔行者〕自身の祈願をなした〔力〕によって」と述べている点もプトン説と大変類似している。また“幻身”という語句の使用をあくまで光明を実現するまでに限定し、光明を実現した後に出現する第五次第の幻身については、“双入受用身”と呼んで区別している。プトンもまた第五次第の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

幻身を“双入の身体”“双入受用身”と呼び、第三次第の幻身と区別しているが、これは第三次第で想定した幻身の内容と第五次第の想定した幻身の内容が余りにもかけ離れているため、名称を使い分けたと考えられる。このようにプトンはアバヤーカラグプタの影響を強く受けていると思われる。

2. ツォンカパの主張

次にプトンの説とはかなり相違するツォンカパの主張を見ていこう。

2.1 第三次第の幻身説の特徴

ツォンカパは第三次第の幻身について次のように説く。

> その時光明を現出するのは死ぬ際の順序のようにである。(様々な光景が現れて) 最後に，古い粗い蘊 (元の肉体) より (体外) 離脱して風(ルン)と意識だけで中有を成就するように，光明の最後に，風(ルン)と意識だけから幻身を成就しなくてはならないことを知るのである (RIGS, 57a1–2)[17]。

ツォンカパは第三次第の幻身の段階で、死ぬ際に中有の身体が元の肉体を離れて成立するように、死ぬ時と同じような光明を作為的に現出し、意識と風(ルン)だけで出来た幻身を実際に体外離脱して成就するものと考えていた。

そしてこのような幻身が第三次第の段階で必要とする理由を次のように述べている。

> 無上〔瑜伽〕の道で一生のうちに成仏するのであれば、また身体が成立した時から (生まれた時から) 相好によって飾られた身体を得なくてはいけないと説かれていることはない。したがって有学の道で相好に飾られた身体を獲得しないならばまた、〔色身の〕同類因がないゆえに突然に身体の状態が変化することもないのである。それゆえ究竟次第の有学の道〔を学習する〕時点から相好で飾られた身体を獲得しなくてはならない。この異熟の粗大な身体を本尊の瑜伽で観想したことでは、相好で飾られた身体を生起することもなく、生起次第の時点と同様に智慧で本尊の身体を観想しただけの身体によっても〔色身の同類因を〕満足しないゆえにそれらとは別の相好で飾られた身体を得た特別の本尊瑜伽が必要となる。その質料因はまた風(ルン)より他にはないゆえに、風(ルン)から幻身を成就する方法がどうしても必要なのである (RIGS, 56a5–b3)[18]。

ツォンカパは光明を獲得するだけでは不十分で、受用身の同類因となる身体を獲得すること無しに成仏はありえないとした。そして尊身の単なる観想だけでは受用身の同類因とはならず、第五次第の幻身と同様の、風(ルン)と意識で出来た幻身を第三次第の幻身として必要と想定したのである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

2.2 第三次第の幻身と第五次第の双入の幻身の違い

次に第三次第の幻身と第五次第の双入の幻身の違いについては、次のように述べている。

> 有学の双入の幻身を獲得して以降はその同類〔の流れ〕を絶つことが無いゆえに、“実体に住しているもの”というのであって、“金剛身”という典型的条件も備えている。第三次第の幻身は勝義の光明を実現したら、消えていくのであるから、“金剛身”と説かれているけれども、典型的条件を備えていないゆえに前者（有学の双入の幻身）のようには存在していないことを考慮して“瑜伽行者の想念上に存在する智身”と呼ぶなら、矛盾は無いのである（RIGS, 215a3–5）(19)。

このように第三次第の幻身と第五次第の双入の幻身の違いについては、ともに意識と風(ルン)だけで出来た幻身を実際に体外離脱して成就するものであることには変わりないとし、第三次第の幻身は分別智とその風(ルン)を親因として成立するため、第四次第の勝義の光明において消滅するが、第五次第の双入の幻身は無分別智とその風(ルン)を親因として成立するためそのまま仏の色身へと流れを絶つことなく移行していくものとした。これについては既に発表しているので（平岡 1996）、ここでは概略を述べるに止める。

2.3 ツォンカパ説の典拠

2.3.1 第三次第の幻身観の典拠

ツォンカパは自説の第三次第の幻身の典拠として、先のプトン説で紹介した CMP の箇所を以下のように解釈している。先と重複するが、CMP の該当箇所を示してから、ツォンカパの解釈を見ていくことにしよう。

> CMP の本文
> ①「自らの心を正しく如実にことごとく知る」ということは、②諸々の蘊・界・処はなく、③智慧のみによく顕現するもののみによって全ての相を備えた尊の身として認識された彼のものもまた、幻と夢などの十二種の譬えでよく象徴されていて、これは諸仏の意の自性の身体である〔ということである〕。

> ①「心を如実に知るということ」は定寂心であり②「蘊・界・処においては存在しない」とは、定寂心の風(ルン)と心だけ以外の他の身体から幻身を成就しないということである。
> ③〔「智慧《のみ》によく顕現するもの《のみ》」とある〕前者の「のみ」は分別〔智から幻身を成就すること〕、後者〔の「のみ」〕は〔肉体などの〕粗大な蘊から〔幻身を〕成就すること否定したのである。定寂心の智慧のみから、相好を備えていて十二の譬えで象徴される幻身を成就するという〔意味〕である（RIGS, 211a6–b2)(20)。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

ツォンカパは下線部①は定寂心を指すとし、②で「蘊・界・処においては存在しない」とは、定寂心の風(ルン)と心以外の幻身の成立要素を排除したと解釈している。特に③では「後者〔の「のみ」〕は〔肉体などの〕粗大な蘊から〔幻身を〕成就すること否定した」として、先に心の中での尊身の観想と限定したシャーキャミトラとは全く異なる解釈を施している。

2.3.2 シャーキャミトラの扱い

次に以上のようなツォンカパの解釈は、プトン説は言うに及ばず、シャーキャミトラの説とも矛盾するが、これについて考えてみよう。まずツォンカパは『五次第』とシャーキャミトラの関わりについて次のように述べる。

> では第二次第はシャーキャミトラが著されたという説明をどう考えるかといえば、(中略) 前半を聖者がお書きになった残部をシャーキャミトラに命じて書かせたのではないかと思う (RIGS, 25a4 –25b2)[21]。

しかし同時に次のようにも述べている。

> シャーキャミトラ阿闍梨がお書きになったものについて、第二次第の著作の様子は〔すでに〕説明し終わったが、CMP の注釈をシャーキャミトラがお書きになったというのは、その阿闍梨と名前が同じなだけとするのが適当である。聖者の弟子シャーキャミトラであるとするのであれば、〔それは〕絶対に違うのである (RIGS, 27a4–5)[22]。

このようにツォンカパはシャーキャミトラを阿闍梨という尊称で呼び、『五次第』の著者の一人として尊敬を表しながら、CMP の注釈の著者はいわば同姓同名の別人と断定するのである。

2.3.3 幻身説の典拠の限定

ツォンカパは自説の幻身説の典拠について次のように述べている。

> 「幻身はラマの口訣だけから知らなくてはならない」という際の口訣の究極のものは『五次第』と CMP の２つである。さらにまた『五次第』で不明瞭〔な箇所〕は、CMP に明瞭に示しているから、CMP から理解しなくてはならない。(中略) 主要な意味はそれら (『五次第』と CMP) から理解できるのであって、〔２つの〕典籍によって示されただけの意味をよく理解すれば、口訣の重要な要点などを錯誤することはない。しかしその努力を長くなさずに、他の瑣末な口訣に努力するならば、「ラマの口訣より知らねばならない」と述べられた口訣の要点のほんの一面を見ても〔理解するには〕至らないと思えるのである (RIGS, 207a5–207b2)[23]。

ツォンカパはこのように自身の幻身説の典拠をほぼ『五次第』と CMP の二つに断定し、特に「さらにまた『五次第』で不明瞭〔な箇所〕は、CMP に明瞭に示しているから、CMP

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

から理解しなくてはならない」とし、CMP を自説の最大の典拠としている。そしてそれ以外のシャーキャミトラの CMPT を始め、他の『五次第』関係の典籍の主張を否定している。これは先にプトンの幻身説が様々なインドの学匠の説を典拠に成立していることと比較して大変対照的である。

まとめ

プトンは第五次第の双入の幻身“双入の身体”を「三顕現（顕明・増輝・近得）の〔智慧とその〕智慧の風(ルン)を伴ったものから」「水面から魚が飛び出す格好で起こす」とした。即ち第五次第の双入の幻身は意識と風(ルン)で出来た身体とし、この身体が基となって変化身を流出するとしたのである。この説はインドで既に主張されていたものであり、第五次第の双入の幻身説としては一般的なものであったと思われる。

そしてツォンカパもまたこの説に準拠している。プトンとツォンカパの説の特徴的相違点は成仏のあり方であった。プトンは第四次第の光明を達成すれば、前から強く持っていた信念の力で自然に光明から第五次第の双入の幻身が出現すると考えた。これはインドでも見られたアバヤーカラグプタやナーガボーディ等の主張と類似しており、プトン説はインドの伝統的解釈の一つの延長線上にあると考えられる。これに対しツォンカパはプトンの説では双入の幻身を獲得するための同類因が不十分であると考えた。ツォンカパの直弟子ケートゥプジェ（mKhas grub dGe legs dpal bzang, 1385–1438）はツォンカパの立場を次のように代弁している。

> その〔第五次第の双入の〕身は同類因無しに生じることは理に適っていない。ゆえにいかなる同類因から成立するのか、（中略）これ〔有漏の肉体〕を捨ててその受用身を成就する仕方はどのようになすか等を良く知ってからそれらの道を成就しなければならない。そうでなければ勝者の身体を荘厳する基が何もない。「心を楽で鮮明な無分別に置く状態だけを習熟することで俱生の智慧、法身を実現して成佛するなり」と言うならば、相好や受用身・変化身などいずれも無い法身のみの衆生の体を持つ佛というものを認めなければならない（KGG, 3b7–4a2）(24)。

このような立場からツォンカパは双入の幻身の原型となるものが第三次第の幻身と位置づけ、これを成就する事無しには第五次第の双入の幻身、ひいては受用身は達成できないため、成仏はできないとしたのである。

このように両者の成仏観は全く異なるものであったが、ツォンカパの説は彼のオリジナルの説であったのであろうか。典拠を『五次第』と CMP、特に CMP に限定したのであるが、ツォンカパが主張する第三次第の幻身説が実際、CMP に説かれているか否かについて考えてみたい。以下はいずれもツォンカパが自らの幻身説の典拠として指摘している箇所である。

> いずれか顕教などの理趣を学ぶ者や、生起次第に住して観想する者たちも一切法を幻の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

如し夢の如し影像の如しと譬えを述べて強く信解しても、それらを譬えとして自加持の口訣、智慧のみによる意の自性の尊身を円満することを知る者とはならないのである(CMP, 96a3–5)[25]。

この意識もまた初めに“死”の身体の自性（本性）を捨てて、それ（意識）でできた姿となるのである。そのように凡夫には中有という輪廻の因となる。それ自体がラマの相伝により一切如来の口訣を備えた者においては自加持というものに、いずれか壁布の模様が鏡の中によく現れるように金剛身の本性によって自身を変化させるのである(CMP, 96b8–97a2)[26]。

他にツォンカパはナーローパの *Pañcakramasaṃgrahaprakāśa* (PSP, 277a2-3) の「風(ルン)と心だけから生じた　幻身は顕現と伴う」[27]との箇所を自説の典拠に引用しているが、これらはいずれもツォンカパの第三次第の幻身説を彷彿させるものである。したがってツォンカパの説自体も彼のオリジナルではなく、インドから用いられていた解釈であった可能性も十分に考えられる。この問題に関しては今後さらに検証していきたい。

略号表

CMP　Āryadeva. *Caryāmelāpakapradīpa* (*sPyod pa bsdus pa'i sgron ma*). Tohoku No.1803. sDe dge ed. bstan 'gyur. rGyud, ngi 57a2–106b7.

CMPT　Śākyamitra. *Caryāmelāpakapradīpanāma ṭīkā* (*sPyod pa bsdus pa'i sgron ma zhes bya ba rgya cher bshad pa*). Tohoku No.1834. sDe dge ed. bstan 'gyur. rGyud, ci 237b1–280b2.

KGG　mKhas grub dGe legs dpal bzang. *rGyud thams cad kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i bskyed rim dngos grub rgya tsho.* Tohoku No.5481. Zhol ed. (ja).

PKPP　Vīryabhadra. *Pañcakramapañjikārthaprabhāsa* (*Rim pa lnga pa'i dka' 'grel don gsal ba*). Tohoku No.1830. sDe dge ed. bstan 'gyur. rGyud, ci 142b7–180b3.

PKTM　Nāgabodhi. *Pañcakramaṭīka maṇimālā* (*Rim pa lnga pa'i bshad pa nor bu'i phreng ba*). Tohoku No.1840. sDe dge ed. bstan 'gyur. rGyud, chi 14a6–157a7.

RISG　Tsong kha pa Blo bzang grags pa. *rGyud kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i man nag rim pa lnga rab tu gsal ba'i sgron me.* Tohoku No.5302. Zhol ed. (ja).

RNMKH　Bu ston Rin chen grub. *dPal gsang ba 'dus pai rdzogs rim rim lnga'i dmar khrid kyi man ngag yid bzhin nor bu rin po che'i za ma tog.* Tohoku No.5082. Zhol ed. (tha).

SAK　Abhayākaragupta. *Svadhiṣṭhānakramopadeśa* (*Rang byin gyis brlab pa'i rim pa'i man ngag*). Tohoku No.1500. sDe dge ed. bstan 'gyur. rGyud, zha 250a7–251b1.

GSTY　Bu ston Rin chen grub. *dPal gsang ba 'dus pa'i rgyud 'grel gyi bshad thabs kyi yan lag gsang ba'i sgo 'byed.* Tohoku No.5075. Zhol ed. (ta).

PSP　Nāropa. *Pañcakramasaṃgrahaprakāśa* (*Rim pa lnga bsdus pa gsal ba*) Tohoku No.2333. sDe dge ed. bstan 'gyur. rGyud, shi 276a7–278a7.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

文献表

Mimaki Katsumi and Tomabechi Toru

1994 *Pañcakrama: Sanskrit and Tibetan texts critically edited with verse index and facsimile edition of the Sanskrit manuscripts.* (Bibliotheca Codicum Asiaticorum 8). Tokyo : Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco.

平岡宏一

1994a 「定寂身についてのプトン・ツォンカパの見解」『日本西蔵学会会報』40、pp.45–51。

1994b 幻身についてのプトン・ツォンカパの見解（1）——鏡の映像の譬えをめぐって——」『印度学仏研学研究』43（1)、pp.191–193。

1995 「幻身についてのプトン・ツォンカパの見解（2）——ツォンカパ自身による清浄・不浄の幻身の定義について——」『印度学仏研学研究』44（1)、pp.164–166。

1996 「ツォンカパの定義した清浄・不浄の幻身について」『密教文化』193 号、pp.46–35。

1998 「定寂心についてのプトン・ツォンカパの見解」『日本西蔵学会会報』43、pp.3–12。

1999 「幻身についてのプトン・ツォンカパの見解（3）——“夢” の身体をめぐって——」『日本西蔵学会会報』44、pp.23–30。

2001a 「チベットにおける秘密集会第四灌頂の意味について」『印度学仏教学研究』49（2)、pp.166–168。

2001b 「定寂心についてのプトン・ツォンカパの見解（2)」『日本西蔵学会会報』46、pp.31–39。

吉水千鶴子

1988 「Pañcakrama における三智・三空と prabhāsvara——タントラ仏教における空性理解の問題点——」『成田山仏教研究所紀要』11、pp.447-468。

注

(1) RIGS, 80b2–3: slob lam du bde ba chen po'i ye shes de kho na nyid kyi don la mngon sum du zhugs pa'i don dam 'od gsal.

(2) RNMKH, 17b3: 'od gsal ba ste shin tu gsal brtag tu snang ba'i mtshan nyid can don dam pa'i bden pa rang gi mtshan nyid ye shes kyi mig gis mthong ngo / de ltar thams cad stong pa nyid mngon sum du byas nas.....

(3) RNMKH, 9b4–5: shes bya ni / khams gsum po thams cad sgyu ma lta bu'i sku rdo rje 'chang chen po'i rang bzhin du zhes par bya ba yin la / spang bya ni / sgyu ma lta bu ma shes nas dngos par bden par bzung bas las bsags te 'khor bar 'khyams pa yin pas de spang par bya ba'i phyir ro / /

(4) RNMKH, 16b3–4: gdams ngag gi gnad dang ldan pas bar do la bar dor ngo shes par gyur ba dang / bar do rlung sems las grub ba'i sgyu ma lta bu'i sku 'di ril por 'dzin pa

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

dang / rjes su gzhig pa'i bsam gtan gnyis gang yang rung bas 'od gsal du bcug ste /

(5) RNMKH, 17b4–5: sgyu ma lta bu'i ting nge 'dzin gyis brtan g-yo snod bcud thams cad sgyu ma lta bur mthong ba de nyid la ma yengs par cir yang mi lta ba'i tshul gyis stong pa nyid du brtags pas de thams cad rim gyis 'od gsal du dengs pa ni rjes su gzhig pa'i bsam gtan yin la /

(6) RNMKH, 17b5–7: dag gzhan brtan g-yo khams gsum pa thams cad rdo rje 'chang chen po'i sku sgyu ma lta bu'i sku gcig tu mthong ba de nyid la rtse gcig tu bzhag ste ma yengs par brtags pas sku de nyid 'od gsal sprin med pa'i nam mkha' ltar gyur ba ni ril por 'dzin pa'i bsam gtan te /

(7) RNMKH, 16b4–6: zung 'jug gi skur ldang bar bya'o snyam du 'phen pa sngon du btang nas bsam gtan gnyis kyi sgyu lus 'od gsal la du bcug la bsgom par bya'o / / bsgoms pas snang ba gsum po rnam par dag pa'i 'od gsal rtogs pa la rgyun du mnyam par bzhag pas sgyu ma 'od gsal gyi mes dag par byas nas sngon gyi 'phen pas rgyu byas rjes su dran bas gsos btab / ting nge 'dzin gyis mtshams sbyar nas lugs ldog gi snang ba gsum ye shes kyi rlung dang bcas pa las zung 'dzug gi skur chu las nya ldang gi tshul du bzhengs par 'gyur ro /

(8) CMP, 94b2–4: ① rang gi sems yang dag pa ji lta ba bzhin du yongs su shes par zhes bya ba ② phung po dang khams dang skye mched rnams la yang med pa / ② ye shes tsam du yongs su snang ba tsam gyis mtshan thams cad dang ldan pa'i lha'i skur gzung ba de yang sgyu ma dang / rmi lam la sogs pa'i dpe rnam pa bcu gnyis kyis nye bar mtshon pa 'di ni sangs rgyas rnams kyi yid kyi rang bzhin gyis sku yin no /

(9) CMPT, 71b1–2: rang gi sems ni rang gi shes pa ste / don dang mthun pa ni yang dag pa'o / / ji lta ba bzhin zhes pa ni ji ltar gnas pa'o / / de yongs su shes pa ni rnam par ma rig pa ma yin pa'o /

(10) CMPT, 71b2: phung po khams dang skye mched rnams la yang med pa ni rang bzhin stong pa nyid kyi phyir ro / / rang bzhin gyis stong pas ni bshig nas stong pa la sogs pa bsal ba yang yin no /

(11) CMPT, 71b2–4: sems tsam du snang ba ni dgag pa smos pa ste / ma yin par dgag pa'o / / sems de yang cir snang zhe na / mtshan thams cad dang ldan pa'i lha'i skur snang ste / thig le la sogs pa'i rnam pa las dran pa tsam mam / rim gyis mtshan sum cu rtsa gnyis dang dpe byad brgyad cus brgyun pa'i lha'i skur langs pa gang yin pa de la de skad ces bya'o /

(12) GSTY, 32b3-4: rim pa gnyis pa sh'a kya bshes gnyin gyis mdzad do /

(13) ナーガボーディの第三次第の幻身（PKTM, 117a1）
幻の十二の次第によって、生起し存在する自性を持つものは智身と見做して、外にある諸々の事物もまたそれ（智身）のみばかりである見るべきなりというこのことが自加持次第なのである（sgya ma'i dpe bcu gnyis kyi rim pas bskyed pa yod kyi rang bzhin can nyid ye shes kyi skur mthong nas phyi rol na gnas pa'i dngos po rnams la yang de kho na bzhin du brta bar bya'o /）。
ヴィールヤバドラの第三次第の幻身（PKPP, 174a4–6）
無縁ということは縁ずる事物に明らかに執着しないのである。それは世俗において自性を欠いていて、それはまた幻の如くと知るべきなりという意味である。それら事物でいずれであっても根〔識〕の認識対象となるものは、等引でない〔後得の〕状態においても佛の自性と知るべ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

きである (dmigs pa med ces bya ba ni dmigs pa'i dngos po la mngon par zhen pa med pa'o / / de kun rdzob tu rang gi ngo bo med pa ste / de yang sgyu ma lta bu shes par bya zhes bya ba'i don to / / de dag dngos po gang dang gang dbang po'i spyod yul du gyur ba de dang de / mnyam par ma bzhag pa'i gnas skabs na yang / sangs rgyas kyi rang bzhin du shes par bya'o /)。

(14) PKTM, 117b5: 'od gsal ba ni rgyu yin te / de las sku 'byung ba'i phyir ro / / bdag byin gyis brlab pa ni 'bras bu yin te / de ni de las 'byung ba'i phyir ro /

(15) PKTM, 120a5-b2: dri za'i sems can zhes bya ba ni lus kyi za ma tog bor te dbang po kun dang ldan pas lus gzhan len par byed pa'o / / 'dir ni sgyu ma lta bu'i lus la phung po'i rnam par rtog pa mi dmigs pa'i phyir dri za'i sems can kho na yin te / dri za'i sems can dang sgyu ma'i lus la khyad par 'ga' yang med do / / ..... ye shes kyi sku de ni thams cad stong pa nyid kyi de kho na nyid las byung ba yin no /

(16) SAK, 250b7–251a1: 'di ni 'dir rjes su gzhag pa'i rim pas me long la dbugs kyi rlungs pa yal ba ltar sa bcu'i dbang phyug sgyu ma'i sku sa bcu gcig par sgrib pa dang bcas pa'i gnas yongs su gyur pa'i ngo bo 'od gsal du zhugs pa rab tu bstan to / .....gdul bya'i skye bo'i bsod nams dang rang gi smon lam gyis 'phen pas skad cig gis bdag nyid spros pa thams cad stong pa nyid kyi bdag nyid bde ba chen po'i rang bzhin thugs rje chen po'i ngo bo nyid kyis zung 'jug longs sbyod rdzogs pa'i sku rgyun mi 'achdp sprul pa sna tshogs pa rab 'byams rnams kyis nam mkha'i khongs gang bas gzhan gyi don yang dag par bsgrub par 'byung ngo / /

(17) RIGS, 57a1–2: de'i tshe 'od gsal mngon du byed pa 'chi ba'i rim pa bzhin du byas pa'i mthar phung po rags pa rnying pa'i lus las logs su bye nas / rlung sems tsam las bar do grub pa'i rim pa bzhin du 'od gsal gyi mthar rlung sems tsam las sgyu ma'i sku yang sgrub dgos par shes pa yin te /

(18) RIGS, 56a5–b3: bla med kyi lam gyis tshe gcig la 'tshang rgya ba la yang lus grub tsam nas mtshan dpes brgyan pa'i lus 'thob dgos par gsungs pa med la slob lam du mtshan dpes brgyan pa'i lusshig ma thob na'ang rigs 'dra'i rgyu med pas glo bur du gnas gyur 'dod pa min no / / de phyir rdzogs rim gyi slob lam gyi skabs nas mtshan dpes brgyan pa'i lus 'thob dgos la / rmam smin gyi lus rags pa 'di lha'i rnal 'byor bsgoms pas mtshan dpes brgyan pa'i lus su skyed pa yang min zhing / bskyed rim gyi skabs bzhin du blos lha'i skur bsgoms pa rkyang pa'i lus kyis kyang mi chog pas de dag las gzhan pa'i mtshan dpes brgyan pa'i lus thob pa'i lha'i rnal 'byor khyad par can zhig dgos la / de'i nyer len kyang rlung las gzhan du 'thad pa min pa'i phyir rlung las sgyu ma'i sku sgrub pa'i tshul nges par dgos so / /

(19) RIGS, 215a3–5: slob pa'i zung 'dzug gi sgyu ma'i sku thob phyin chad nas de'i rigs 'dra mi 'chad pas dngos po la gnas pa zhes bya la / rdo rje'i sku zhes pa'i mtshan nyid kyang tshang ngo / / rim pa gsum pa'i sgyu lus ni don gyi 'od gsal mngon du gyur pa na dag nas 'gro bas / rdo rje'i sku zhes gsungs kyang de'i mtshan nyid ma tshang bas / snga ma ltar mi gnas pa la bsams nas rnal 'byor ba'i bsam ngo na gnas pa'i ye shes kyi sku zhes brjod na 'gal ba med do /

(20) RIGS, 211a6–b2: ① sems ji bzhin du shes pa ni sems dben dang / ② phung khams skye mched la med pa ni / sems dben gyi rlung sems tsam ma gtogs pa'i lus gzhan las sgyu ma'i sgrub pa med pa'o / /
③ tsam sda mas kun rtog dang / phyi mas phung po rags pa las sgrub pa gcod de / sems

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

dben gyi ye shes tsam las mtshan dpe dang ldan pa'i sgyu ma'i sku dpe bcu gnyis kyis mtshon pa sgrub ces pa'o /

(21) RIGS, 25a4 –25b2: 'o na rim pa gnyis pa sh'a kya bshes gnyen gyis mdzad par bshad pa ji ltar yin snyam na / .....stod 'phags pas mdzad pa'i 'phro cig sh'a kya bshes gnyen la gnang ba byin nas rtsom du bcug pa cig yin ma snyam ste /

(22) RIGS, 27a4–5: slob dpon sh'a kya bshes gnyen gyis mdzad pa la / rim pa gnyis pa'i gzhung gi tshul ni bshad zin la / spyod bsdus kyi 'grel pa sh'a kya bshes gnyen gyis mdzad zer ba ni slob dpon de dang ming mthun pa tsam yin na ni rung la / 'phags pa'i slob ma sh'a kya bshes gnyen la gor re na ni ye min par 'dug go /

(23) RIGS, 207a5–207b2: sgyu ma'i sku bla ma'i man ngag 'ba' zhig las shes dgos pa'i man ngag gi mthar thug pa ni / rim lnga dang spyod bsdus gnyis yin la / sras rnams kyi man ngag gzhan las kyang cung zad 'byung ngo / / de yang rim lngar mi gsal ba spyod bsdus su gsal bar ston pas spyod bsdus las rtogs dgos so / / gzhung de dag gis ma zin pa'i zhib cha mang po yang yod mod kyang / gtso bap'i don ni de dag nas zin pa rnams yin pas / gzhung gis bstan tshod kyi don legs par go na / man ngag gi gnad 'gangs che ba rnams mi 'phyug la / de dag la 'bad pa yun ring du ma byas par man ngag phra mo gzhan la 'bad na ni / bla ma'i man ngag las shes dgos par gsungs pa'i man ngag gi gnad kyi phyogs mthong yang 'ong snyam pa mi snang ngo /

(24) KGG, 3b7–4a2: sku de rigs 'dra'i rgyu med par skye ba mi 'thad pas / rigs 'dra'i rgyu ji 'dra zhig las sgrab pa dang / lam de dag sgrub dgos kyi / rgyal ba'i sku mtshan dpes brgyan pa 'grub pa'i gzhi tsam yang med par / sems bde gsal mi rtog pa la gnas pa 'di ka goms par byas pas / lhan cig skyes pa'i ye shes chos sku mngon du gyur nas 'tshang rgya'o / zhes brdzod kyang / mtshan dpe dang longs sprul sogs gang yang med pa'i chos sku rkyang pa'i sangs rgyas so skye'i lus can khas len dgos mod kyi /

(25) CMP, 96a3–5: gang mdo sde la sogs pa'i tshul la zhugs pa dang / bskyed pa'i rim pa la gnas pa'i sgom pa po rnams kyang chos thams cad sgyu ma lta bu dang / rmi lam lta bu dang / gzugs brnyan lta bu zhes dper brjod cing lhag par mos kyang / de rnams dpes bdag la byin gyis brlabs pa'i man ngag ye shes tsam gyis yid kyi rang bzhin gyi lha'i sku rdzogs par 'gyur ba shes par ni mi 'gyur ro /

(26) CMP, 96b8–97a2: rnam par shes pa 'di yang thog mar 'chi ba'i lus kyi rang bzhin yongs su spongs nas des byas pa'i gzugs su gyur pa'o / / de ltar byis pa so so'i skye bo srid pa bar ma pa zhes bya ba'i 'khor ba'i rgyur 'gyur ro / / de nyid bla ma brgyud pa'i rim gyis de bzhin gshegs pa thams cad kyi man ngag thob pa rnams ni bdag la byin gyis brlabs pa zhes bya ba 'di ltar rtsig pa'i ras ris me long gi nang du nye bar snang ba de bzhin du rdo rje'i sku'i ngo bo nyid kyis bdag nyid sprul te /

(27) rlung sems tsam las byung ba yi / / sgyu ma'i lus ni snang bar bcas /

NII-Electronic Library Service